

れいな水の谷川に沿って登っていくと、背中が緑で腹が赤いスズガエルがたくさんいた。

谷川から離れて急な坂道を登ると七仏庵に着いた。皆で石仏に手をあわせたあと、石仏の後ろの岩をよじ登ると、崖の上に優しい顔の菩薩半跏像が浮き彫りになっていた。ここからは慶州の平野や南山の岩峰がみわたせ、一同歓声をあげた。学生たちは拓本をとり始めたが、風が吹いてなかなかうまくいかなかった。

私たちは親切にもらった礼を言って、先に崖の下に降りた。小さな男の子を連れた女性が、石仏の前に座ってお経を読んでいた。

南山の山中には道標が少なく、しかもそのわずかの道標はハングル文字で書いてあったので、韓国語のわからない私たちにとっては歩きやすい山ではなかった。しかし、すばらしい景観、ごみ一つ無い山道、次々と出会う石仏、親切な大学生たちのおかげで大変気持ちよかった。

石仏のいくつかは絶壁に彫られており、昔の人はいったいどのようにしてこの岩を刻んだのだろうかと思議であった。いずれにしても人々は命がけであったにちがいない。今でも石仏の前には線香や供え物が置いてあったり、ろうそくの火がともっていたりし、山の中の小さな寺には人が住んでいた。南山で過ごしたこの日は、韓国の人たちの仏に対する思いを感じた一日だった。

山をおりた所にため池があり、岸からヒシとマツモが見えた。農家の庭にはトウガラシが干してあり、畑ではゴマを刈り取っていた。

慶州最後の日は市内の観光をした。古墳公園、東洋で

最古の天文台である瞻星台、半月城、石氷庫、慶州博物館に行った。半月城の堀にはハスが生育しており、水面にはサンショウモとウキクサ類が密生していた。

昼食後、釜山行きの列車に乗った。線路沿いのため池がいくつか見えた。釜山に近くなったころ、セリを栽培している所があり、水に入って収穫中の人もいた。海岸に出ると、海辺に沿ってずっと鉄条網がはってあり、兵の姿も見えた。

翌26日の朝、釜山のホテルを出発し帰国した。

韓国で大変お世話になり、帰国後も文献や資料をお送り下さった宋鍾碩博士、韓国の水生・湿生植物に関する文献をお送り下さった崔斗文教授、韓国語の文献を訳していただいた韓久美氏、水草を同定していただいた角野康郎博士に厚くお礼申し上げる。

引用文献

鄭英昊・崔鴻根、1987. 咸安所在 自然沼の水生管束植物相 (原題 韓国語). Korean J. Environ. Biol. 5 (1): 17—28.

季永魯・季南淑・余星姫、1987. 洛東江下流地域の植物相 (原題 韓国語). 韓国自然保存協会調査報告書 26: 121—141.

我が国における保護上重要な植物種および植物群落の研究委員会植物種分科会 (編). 1989. 我が国における保護上重要な植物種の現状. 320 p p. 日本自然保護協会・世界自然保護基金日本委員会, 東京.

○立花吉茂著『水辺の草花』(淡交社、1990年3月、95頁、2500円)

日本の水草を、カラー写真に類書とは一味ちがった解説を付して紹介した新刊である。「水辺に立って目につきやすい、また美しいものを選んで解説することにした。」とあるように、本書は日本の水草の全てを取りあげているわけではない。浮葉性グループ(20種)、浮遊性グループ(3種)、抽水性グループ(63種)、湿地性グループ(24種)の順に計90種が選ばれている。その中にはウォーターポピーやオオオニバスなど国内で栽培される外来水草が多く含まれる。沈水植物は対象外となり含まれて

いない。巻頭には「ガマの穂の効用」、「食べられる水草」など7編のコラム、巻末には水草の育て方について、著者の長年の経験にもとづく親切的な説明がある。

本質的なことではないかもしれないが、写真と解説のあか抜けしたレイアウトは、ページを繰る楽しさを倍加させてくれる。
(角野康郎)